



母の腰痛

愛知工業大学の手嶋紀雄先生からバトンを引き継ぎました大阪府立大学の床波志保です。「ぶんせき」誌へは初投稿なのでドキドキしながら執筆させて頂いております。手嶋先生とは2009年 Flow Analysis XI (スペイン開催) で初めてお会いして以来、親しくさせて頂いております。Flow Analysis XI は私がこれまでに参加したどの国際学会よりもアットホームな雰囲気です。今年開催されており、私はすぐにその魅力の虜になってしまいました。次年度タイで開催された 16th International Conference on Flow Injection Analysis (16th ICFIA) へも参加させて頂きました。そこでは、学生時代に分析化学の授業でお世話になった教科書“分析化学I”の著者である Prof. Gary D. Christian も参加されており、お会いできたことに感動を覚えたことを記憶しています。ただ一つの心残りは、普段元気の良い私もクリスチャン先生を目の前に萎縮してしまったのか“Could I have your autograph?”の一言が言えず、先生のサインを頂けなかったことです。このリベンジを果たすべく今年度開催予定の 17th ICFIA へもエントリー済みです。

さて、そろそろ本題に移りますが、執筆のお話を頂いて以来、どんな内容にしようかと思案しておりましたが、ただ時間だけが過ぎるばかりでした。そんな時、母が謎の腰痛に悩まされるという事件が起きました。その痛みの訴え方は尋常ではなく、睡眠を取ることすらままならない様子でした。素人考えで痛みを止めるにはバファリンかな? と飲み飲ませてみるものの痛みは一向に治まらず、「痛いよ〜(汗)」と言う母に何もしてあげられない状態が続きました。病院嫌いで滅多に病院に行かない母ですが、半ば引きずりながら近くの整形外科へ連れて行きました。その日はゴールデンウィーク明けの診療日とあって待合室は患者でごった返していました。待ち時間の際、座ると痛みが強くなると言っていた母は、たとえ椅子が空いていようと座ろうとせず立ったままで、子供の私がそんな母の横で座っているという奇妙な光景が出来上がってしまいました。端から見ると「なんて親不孝な娘だろう!」と思われたことでしょう。診察して頂いた先生のお話によると、考えられる原因としては“腰椎椎間板ヘルニア”と“腰部脊柱間狭窄症”が挙げられるとのことでした。ヘルニアは聞いたことはありましたが、詳細については分からず、“腰部脊柱間狭窄症”に関しては……名前すら聞いたことがありませんでした。“腰椎椎間板ヘルニア”は髄核(椎間板中心部にある)が弾力を失い繊維輪に亀裂が生じ、髄核が繊維輪を破って飛び出し神経を圧迫した結果起こる病気のように、“腰部脊柱間狭窄症”は文字どおり脊柱管がなんらかの原因で狭くなり、その結果、神経や血管を圧迫するために痛みや痺れを起こす病気です。若年から高齢者まであらゆる年代で発症する可能性があるそうです。はてなマークが頭に浮かんでいる親子を前に、先生から飛び出した言葉は「腰部脊柱間狭窄症は、みのもんたが患って手術した病気ですよ(笑顔)」でした。今思えば、先生としては手術をすれば痛みも無くなり“みのもんた”のように完全復帰できることを伝えたかったのでしょうか。しかし、その時の私が理解(想像)できたのは“みのもんた”の顔だけで、“手術”という恐怖の二文字が頭の隅をグルグルと回り不安になるばかりでした。先生のお話によると、整形外科で一般的に行われる検査はレントゲン撮影、CT検査、MRI検査の三種類で、母の場合、神



Flow Analysis XI エクスカーションでの集合写真

経、椎間板などの軟部組織の異常部位と状態を詳しく知る必要があるためMRI検査を受ける必要があるようでした。治療方針と手術が必要か否かについては検査結果を見てから判断するとのことでした。私が驚いたのは、MRI検査は容易に受けられるものではなく、1ヶ月待ちが普通のようなものでした。「1ヶ月間の状態で待つのですか?」という私の問いに、無情にも先生の答えは「仕方ないですね。痛み止めと強力な胃薬を出しておきますから耐えて下さい。あとは安静にすることですね。」でした。その日は薬を頂いて家へ帰りました。しかし、家に帰り着いてしばらくすると、“診断結果が出るまでに1ヶ月? 医療先進国と言われる日本でこんなことがあり得るのだろうか?”という疑問と怒りが込み上げてきました。確かにMRIは、販売価格にばらつきがあるものの数億円と高価なため全ての病院で保有できるわけではなく、また、検査時間も15分~1時間程度かかる(検査部位・条件により異なる)ため1日の検査可能人数も限られているのが現状のようなので諦めざるを得ないのかもしれませんが、……考えさせられました。と言いますのも、私の主な専門はバイオセンサ開発であり、外部資金獲得のため提出する申請書類の中には“装置の小型化、低コスト化”や“操作性の単純化”および“迅速な検出”などといった文言を実際のニーズも考えずに多用していたからです。今回のことで、迅速に検査結果を出すことが、医師が治療方針を決める上で重要であり、何より患者の不安と苦痛を一刻も早く取り除くためにいかに重要であるかが母の身を借りて身にしてみても分かりました。私は医師ではないので母の腰痛をすぐに治してあげることはできませんが、分析化学者として今の私にできること(=自身の研究)から頑張り、診断結果を迅速に導き出す検査システムの構築に少しでも寄与できるよう努力して行きたいと思っています。

今回は、私がポスドク時代に共同研究を通じて知り合いました九州大学の橋本弘範先生にお願いしました。SPRING-8での連日徹夜の測定でお互い精神崩壊寸前?! という素晴らしい状態での出会いでしたが……その後も何度か測定でお世話になり、私の様々な無茶振りを辛抱強く聞いて頂きました。お忙しいにもかかわらず私からの執筆依頼に即、ご快諾頂きましたことにこの場をお借りして改めて感謝致します。

[大阪府立大学 床波志保]